地域づくり研修旅行報告

松本大学松商短期大学部
木　内　義　勝

玉井先生と清見村の松葉助役のお話に刺激を与えられて、さっそく第１回の研修旅行「飛騨・美濃の旅」が催された。研修の概要は、以下の通りである。

日　時　　平成１５年６月５日（木）、６日（金）――１泊２日
テーマ　　「行政・住民協力型の村づくり」
スケジュール

（第一日目）　９：００　　松本大学出発
　　１１：３０　　高山市到着　清見村松葉晴彦助役合流
　　昼　　食　　清見村が出店している「清見安川店」で昼食
　　午　　後　　高山市町並み散策、飛騨古川「祭会館」見学、
　　飛騨国際生活文化センター見学、
　　大野郡清見村視察
　　・堆肥場
　　・清見園芸育苗センター
　　・農産物加工所
　　・工芸展示即売所
　　宿　　泊　　ホテルパスカル（「ふるさと公園パスカル清見」内）

（第二日目）　９：００　　ホテル出発
　　１０：００　　郡上郡明宝村視察
　　・「明宝レディース」――社長　本川栄子氏
　　１１：３０　　郡上八幡視察
　　・博覧館
　　・郡上八幡旧庁舎記念館
　　・町内散策（水のこみち、宗祇水、城下町プラザなど）
　　（案内役：丸山功氏、村井誠一氏）
　　１５：３０　郡上八幡出発
　　１９：００　松本大学着、解散

参加者　参加者は総勢32名であった。まとまったところでは上水内郡三水村から加わった方が７名、南安曇郡三郷村及木老人クラブから５名、あとは役場関係４名（山形村２名、木曽郡王滝村、北安曇農業改良普及センター）、個人参加５名、松本大学関係11名であった。参加者の多様性が、視察後の話し合いに立体感を加えた。

視察内容と所感

高山市内で初日の昼食に訪れたのは「清見安川店」である。うどん、そば、おにぎりなどを供するこの店は、清見村が高山市内に設けるアンテナショップである。店内には、村産の瓶詰め山菜、ジャムなどが並べられた売店が併設されている。村の産品の売れ行き状況を探る「定点観測網」の一部をなしているといえよう。清見は、高山市の西隣に位置する人口2,500余の村であり、過疎化が進んでいた人口もこの20年ほどは均衡を保っている。一般企業と同様に、常に外部の市場を念頭に置いた取り組みが、このような店の設置に端的に表れている。

清見村は、まさに村全体が企業活動を展開している。松葉助役のダイナミックな考え方と行動力は、精力的な企業経営者そのものである。村内の堆肥場、園芸育苗センター、農産物加工所の責任者には、民間企業から応募したやる気のある人材が就任し、売り上げ、コスト、利益を細心に管理しつつ独立採算を心がけている。お役所仕事ではない。各責任者は、村から借り受けた諸施設に賃料を払い、事業の隆盛に向けて独自の工夫を重ね経営戦略を練っている。村の視察というより、会社の事業部見学の感があった。

たとえば堆肥場は、ふつう外部の人の見学に耐えるようなきれいなものではない。悪臭が漂い、足を踏み入れるのがはばかられるような場所であるのがふつうで、じっさい外の人に公開しているところは少ない。清見村の堆肥場は、まず清潔感があり、なぜか悪臭はなく、責任者のお話によるとかなりの利益を年ごとに計上している。労働環境の整備に気を配り、事業所として利益の確保に努める姿勢がみごとに貫かれた証左である。

自分たちで事業を成功させてゆこうというこの姿勢は、文化の香りが高い領域でも一貫している。おしゃれな木組みの建物にある「工芸展示即売所」では、家具や工芸品の販売を行うだけではない。それぞれの工芸家が村内に住みアトリエ（仕事場）を持って長期にわたって仕事を続け、村とともに栄えられるような息の長い企画のもとに運営されている。また、目の前が開けたすばらしい眺望に恵まれる「ホテルパスカル」は、施設、サービスの面で、ホテルとして一流である。「村営」の響きにともすれば含まれがちな客への甘えが少しもみられない。ゼミの学生や家族を次には連れてきたいと思った。

清見村の次に訪ねた明宝村では、「明宝レディース」の本川社長からお話しを伺った。女性だけで地場産品を加工し、全国をマーケットに手広く通信販売を展開している。温度の日較差を生かしたうまいトマトを律儀なまでに煮詰めてつくる「手作りケチャップ」はテレビでも取り上げられ全国的に有名になった。昭和50年結成の仲良しグループを母胎として、無理なく楽しみながら着実に製品を世に送り出しているという印象を受けた。

第一日目の夜、そして帰りのバスの中は、まるで「出張玉井塾」であった。現地に身を置いて、視察から得た刺激に日頃の問題や課題を重ね合わせ、議論はつきることがなかった。様々な視角からの問題提起と玉井先生の対応がとても参考になった。玉井先生、そして一日中つきそってくださった松葉助役に心からお礼を申し上げます。